

京まち工房



WINTER
情報交流誌

no.

9

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

(財)京都市景観・まちづくりセンターでは、今年度から隔年で景観・まちづくりコンクールを開催します。このコンクールでは、優れた事例を表彰するとともに、広く市民と共に景観・まちづくりについて考え、景観の保全・創造と質の高い住環境の形成など京都の魅力や個性を高めていくことを目的としています。

魅力と活力のあるまちづくりを目指して

景観・まちづくりコンクール

京都のまちの新しい“^{たからもの}資源”発見!

作品募集 平成11年12月24日(金)まで
 作品展示 平成12年1月18日(火)から30日(日)まで
 元龍池小学校講堂(中京区両替町通御池上る東側)

京都景観・まちづくり賞

京都のもつ個性・独自性を創出し、優れた都市景観の維持及び向上に寄与していると認められる建造物。

建築物部門 緑地広場部門
 土木工作物部門 屋外広告物部門

例) 京都の自然、歴史、伝統及び文化に対する理解と配慮がなされている建造物
 将来の京都の景観・まちづくりをリードする建造物

くらしの景観・まちづくり賞

身近な地域のもつ個性に配慮し、快適に暮らすための創意工夫が凝らされた建造物や、地域住民によるまちづくりの取組等の事例。

例) 地域周辺の自然景観や町並み景観に調和している事例
 快適な暮らしを支える質の高い空間を創出している事例
 魅力ある都市居住を提案している事例
 地域環境の向上を目指す地域住民による主体的な取組事例

作品展示

京都景観・まちづくり賞については、下記の通り全作品のパネル展示を行います。会場では作品についての感想や意見も募集します。ぜひお越しください。

- ・展示期間
平成12年1月18日(火)～1月30日(日)
午前10時から午後7時まで(この間の休日を含む)
- ・元龍池小学校講堂
(中京区両替町通御池上る東側 地下鉄「烏丸御池駅」2番出口徒歩1分)

表彰・シンポジウム

表彰式と共に参加された皆さんと一緒に京都の景観・まちづくりについて考えます。

- ・平成12年3月開催予定

あなたのまちづくり拝見

祇園町南側地区

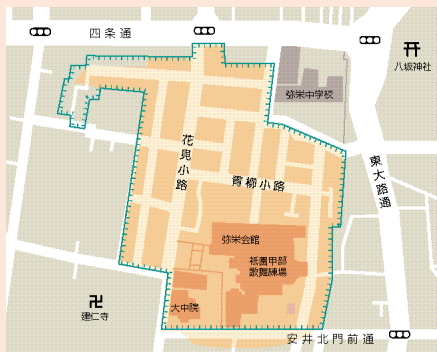
～古き良き祇園の風情を後世に継承する取組～

住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するコーナー。今回は、古き良き祇園界隈の風情を色濃く残し、またその風情を後世まで継承するため歴史的景観保全修景地区(*1)を制定し、景観協定を結んだ、祇園町南側地区の取組を紹介します。

現代に息づく、 古き良き祇園町南側地区

四条通から花見小路を下がると、道の両側にお茶屋を中心とした祇園らしい風情と四条通の近隣とは思えない程静かでしっかりとした雰囲気があり、タイムスリップをしたような印象を受けます。

四条通から南の花見小路を中心とした祇園町南側地区は、古くは建仁寺の境内でしたが、明治以降は京都府に払い下げられ、その後大部分は八坂女紅場学園(*2)の土地として存続し、お茶屋のまちとして発展してきました。以降、幾たびか社会状況が大きく変わる中であっても、まちの様相は変わることなく現在まで受け継がれてきました。



■ 祇園町南歴史景観保全修景地区
■ 祇園町南側地区景観協定

町並みにそぐわない建物の登場、 地区内で危機感が高まりました

ところが近年、地区外からの新しい事業者や住民が新しい建物を建て始めました。それらの建物は建築の際に祇園の風情を意識しているにもかかわらず、どこかそぐわないものとして町並みの中に現れたのでした。

祇園の古き良き町並みは、お茶屋が多いまちの財産であり、重要な商売のパートナーでもあります。町並みの変化に地区内の多くの方が危機感を抱き、そこで「みんながまとまらないと、町並みは守れない」と思いが一致。地元の飲食店や住民約300戸が、この古き良き風情を守るために「祇園町南側地区協議会」を平成8年8月に設立しました。

「古くからこの地区に住んでいる人たちは、建物を建てるにあたっては、共通の物



お茶屋が軒を並べる界隈

差しを持っています。だから何も言わなくても、それぞれが工夫を凝らしながらも地域になじむものが建てられ、町並みが守られてきました。しかし、地区外の人たちに私たちの物差しを何も言わずに分かってもらうのは、とても難しいことです。そこで、私たちはこの物差しを少しでも分かってもらうため、町並みを守るための約束づくりに取り組みました」と協議会会長の杉浦貴久造さん。

地区のルールを、 新しい人たちと分かち合う

行政も積極的に協力することとなり、平成8、9年度には町並みの景観調査が行われ、アンケート、実測調査が行われました。そして平成11年6月に、町並みを守る手段として、町並みの文化財的保存を目的とする「伝統的建造物群保存地区」ではなく、現在の暮らしや商売を優先し、デザイン的な保存・継承を旨とする「祇園町南歴史景観保全修景地区」を採用することを地元



青柳小路に立って花見小路側を見る

の判断で決定しました。そしてこの制度をよりきめ細やかに補強する形で、同年7月に協議会の議決により「祇園町南側地区景観協定」が締結されました。この協定は地

権者が独自に定めたルールです。有効期限は12年間で、12年後には状況に合わせて協定内容を追加・修正することができます。

祇園町南側地区のこれから

現在、地区内の道路では美舗装が施され、花見小路でも工事が進行中です。また地区内で建物が建て替え、新築される際には、町並みに合うものが建てられるようになりました。

今後は、時を経るほどに祇園町南側地区らしい景観が形成されていくことが期待されます。

(*1) 歴史的景観保全修景地区

美観地区あるいは風致地区において、歴史的景観を形成している建造物群がある地域で、その景観を保全・修景する必要があるものについて、京都市市街地景観整備条例に基づき指定される。新築・模様替えにあたっては、市長の承認が必要。また修理・修景の際には、市から一定の補助金が交付される。

(*2) 女紅場学園

明治初年各地に設けられた女子教育機関。明治期京都の勤業政策の一環として、女性に養蚕や織物、裁縫、手芸などの技術を教えた。その後種々の学校に発展・解消した。祇園町南側地区にある舞妓の学校にその名が残る。

祇園町南側地区協議会会長 杉浦貴久造さん

町並み景観は、時代と共に変わるものだと思います。京都の文化・芸能も、時代を重ねるごとに徐々に姿を変えてきました。しかし、それは伝統を踏まえながらもけじめを付けながら変化してきたのです。町並みもこれと同じだと思います。博物館のように保存するのではなく、時代を踏まえながら、最低限のルールである共通の物差しのもとに、各人がプライドと責任を持って建物を修繕・改築し、あるいは建て直していくことが大切です。そうすれば、私たちのまちの町並みは、いつまでも生き生きとして受け継がれていくことができると思います。



お知恵拝借～

in New York



NPOが主体の住環境改善活動

～ニューヨーク・ハーレム地区の取組～

今回のこのコーナーは、センターの評議員である立命館大学産業社会学部のリムボン先生が、ニューヨークに留学(平成10年9月～翌年9月)し、研究された内容から、お知恵を拝借します。

ニューヨーク・ハーレムはどんなまち?

そびえる摩天楼、緑広がるセントラルパーク。ニューヨークのマンハッタンといえすぐにイメージされると思います。ハーレム地区は、セントラルパークの北側に広がっています。ハーレム地区の住民は99%が黒人で、アメリカ経済が好景気であるにもかかわらず依然として危険な場所とされています。

ハーレム地区は19世紀に開発された地区で、地下鉄建設を受けて不動産業者が高級住宅地として整備した場所です。しかしながら、その後の世界恐慌で住宅が売れず、結果仕事を求めて移住してきた多くの黒人のまちとなりました。

ハーレムのコミュニティ再生とNPO

ハーレム地区は、高級住宅地として整備されてきたため、非常にたくさんの立派な建物がストックとしてあります。しかしながら、手入れが行き届かず建物は傷み、空家も増え、またそこが犯罪の温床となり、そして地区の人口が減少するなどの悪循環の中で住環境は悪化していきました。これらのストックを活用して、何とかハーレム地区

の住環境を改善したいとして立ち上がったのが、地区内の教会が組織したNPOのHCCI(Harlem Congregations for Community Improvement)です。



1階にショップが入った改修住宅の事例

ハーレム地区には、住宅経営が成り立たず、ニューヨーク市に物納された土地・建物がたくさんあります。HCCIではこの建物を市から低価格(1ドル)で買い取り、改修して賃貸住宅として低価格でハーレムの住民に提供します。併せて家賃がきちんと払えるように仕事の斡旋

もします。HCCIはこのような不動産事業だけでなく、子供の教育や保健・健康問題、老人のデイケア、趣味、エイズ対策など、地区内の生活に関わるあらゆる分野の事業を展開しています。

HCCIの年間経費は約5億円で、自分たちで捻出しているのはその内1割程度で、うまくお金が流れる仕組みを作っています。事業は、国・州・市からの補助や銀行の低利融資、寄付金により賄われています。そして住環境が整備されることで、ハーレム地区は随分安全な地区へと生まれ変わることが可能となりました。

NPOが住環境を改善し、そのシステムを確立させたことにより、以前はなかった観光客の姿も見られるようになりました。

より安全で住み良い住環境づくりに向けて、HCCIの活動は、これからも続きます。



参加しました!

第3回 市民参加のまちづくり日英NPOフォーラム

『まちづくりにおけるNPOの役割と活動基盤をさぐる』

日本と英国のNPOに関する経験交流プログラムが、京都(まちづくり日英交流'99 in 千本)をはじめ各地で開催されました。その最後の取組である「第3回 市民参加のまちづくり日英NPOフォーラム」が10月17日(日)に早稲田国際会議場において開催されました。

フォーラムでは、「コミュニティのためでなく、コミュニティと共にまちづくりに関わる、専門家の存在が必要」、「コミュニティ自身がコントロール力を持つこと、そしてコミュニティの持てる力をいかに高めていくか(コミュニティキャパシティビルディング)が重要で、それを担うのはNPOの役割である」等々、日英各地区のゲストパネラーから、これからのまちづくりNPOの活躍に向けていくつかのキーワードが投げ掛けられました。

さらに英国のゲストからは、「達成できる目標を掲げながら、できるだけ多くの人を巻き込み、同時に市民意識を高めていきましょう」と呼び掛けがあり、最後には「草の根の人々に力を!」と、これからのまちづくりの担い手へ向けて、熱いメッセージが贈られました。

住民による住民のためのまちづくりの心意気は、はるか海を越えて根付いていることを強く感じました。



京のまちの今昔物語

昭和28年頃の西陣・中筋通。昔の糸卸の商家が建ち並び、軒下で夏には、お年寄りや子供たちが床机を出して碁や将棋に没頭する姿や、近所の犬がのんびり歩く姿が見られた。

近頃ではマンションやビルが建つようになって風景が変わり、通りは抜け道となって車の交通量が増え、残る町家も傷みが激しくなってきた。



コメントは西陣にお住まいの伊藤竜也さんから頂きました。写真は伊藤さんのお父さんが生前に撮影されたものです。



現在の西陣・中筋通

「京のまちの今昔物語」では皆さんがお持ちの昔の写真を切り口にして、現在の京都の問題点を再確認できたらと思います。皆さんもお宅のアルバムの古い写真を探し出してぜひ投稿してください。

京都市景観・まちづくりセンター これまでの主な取組

平成9年10月

平成10年度

(財)京都市景観・まちづくりセンター設立

地域まちづくり活動支援

地域の身近な環境整備を地域自らの課題として主体的に取り組む住民によるまちづくり活動を促進します。

●まちづくり活動支援事業(10年4月～) ＜専門家派遣、活動助成＞

地域でまちづくりを進める協議会等にまちづくりの専門家を派遣したり、活動資金の一部を助成しています。

●地域まちづくりセミナー(11年3月～)

地域でまちづくりを進める具体的な方法等について地域住民、専門家、学識経験者等が共に学ぶセミナー。11年3月～5月に、上京区を対象に、町家、マンション、袋路をテーマに「いきいき定住物語」と題したシナリオを参加者全員で作上げるセミナーを開催しました。現在、他の地区でのセミナー実施に向け、企画会議において検討を進めています。

地域と共生する土地利用促進

京町家の保全・再生や都心部におけるマンション建設など行政や個々の市民や企業の力だけでは解決が困難な個別の土地利用の問題を、多くの関係者のネットワークにより、地域と共生する土地利用として促進を図ります。

京町家保全・再生



●京町家まちづくり調査(10年4月～) ＜京町家保全・再生システムの開発＞

京町家保全・再生の具体化に向けた実現化プログラムの策定を目指し、約600名の市民ボランティアや市民団体の協力を得て、都心4区の京町家の全数調査を実施。これまで、3万2千件の外観調査、5千件のアンケート調査を終え、その集計結果をとりまとめました。さらに、このたび100件の居住者等へのヒアリング調査を終え、現在これらのデータを基に京町家の保全・再生方針及び支援施策の検討を市民、京都市と共に進めています。

●京町家快適環境調査(10年6月～)

京町家の居住空間の環境改善、関連する部材及びシステムの開発に関する研究を受託し、これまで学識経験者、関連企業、専門技術職からなる京町家快適環境研究会を開催し、検討を進めています。

地域と共生する土地利用

まちづくりコンクール

市民のまちづくりへの意識の高揚を図るため、市民参加によるコンクール事業を実施しています。

●京都・学生まちづくりコンクール(10年6～12月)

地域まちづくりの活性化を図るため、都心部(西陣・富有・明倫学区)と南部(高度集積地区)をモデル地区に、地域住民との学習・交流活動を通じて、まちづくりの具体的な提案等を大学生グループに求めるコンクールを実施しました。



景観・まちづくりシンポジウム

景観・まちづくりに関する様々な情報やセンター事業の成果等を発信するシンポジウムを開催しています。

●「京都・学生まちづくりコンクール表彰・発表会」(10年12月)

●「京町家の保全・再生を考える」(9年12月)

●「創造のまちづくり～日米の比較から～」(11年3月)



賛助会員、まちづくりフレンズ

賛助会員は9年度から現在まで延べ個人約350人、団体約90の方々からご支援いただいています。また、センターのボランティアスタッフ「まちづくりフレンズ」は約110人が登録。これまで京町家まちづくり調査、学生まちづくりコンクール、市職員研修などの事業に参加いただいています。月1回のフレンズニュースの発行や勉強会の開催などフレンズ同士の交流・学習活動も活発化しています。

平成9年10月に設立された景観・まちづくりセンターも、今年10月で3年目を迎えました。これまで、住民、企業、行政のパートナーシップのまちづくりの橋渡し役として、「地域まちづくり活動の支援」と「地域と共生する土地利用の促進」を大きな柱に、様々な事業を展開してきました。そこで、今回はこれまでの主な取組内容と最新の取組状況を併せてお伝えします。

平成11年度



●地域共生型土地利用ネットワーク形成に関する調査研究(10年12月~)

都心部の施設建設予定地をモデルに、地域住民、地権者企業、センターからなる地域共生の土地利用検討会を組織し、ワークショップを含めた検討会をこれまで7回開催し、地域と共生する新しいスタイルの土地利用の検討を行っています。



●景観・まちづくりコンクール(11年11月~)

京都の優れた都市景観の形成及び快適に暮らし続けるための創意・工夫が凝らされた建造物や市民の景観・まちづくり活動の取組を表彰するコンクールを実施しています。(詳細は本号1ページに掲載)

トピックス

●「歴史的街並みの活用とコミュニティ創生に関する東南アジア専門家会議」(11年11月)

東南アジア諸国(ベトナム、カンボジア、マレーシア、フィリピン、タイ、インドネシア)で歴史的街並みの保存運動に取り組む専門家を招き、京都で京町家の保存・再生等に携わる市民、専門家等と意見交換を行うシンポジウムを11月6、7日に開催。各国の事例報告や京町家への取組、伝統技能と職人の問題などの検証を通じて、人々の暮らしと結び付いた歴史的街並みの再生・活用運動が新たなコミュニティを創生し、まちづくりへと発展することを確認しました。

平成12年度

●専門家の連携による地域まちづくりの推進に向けて

専門家同士が地域まちづくりを推進していくために必要とされる知識を補完し合い、高め合うためのネットワークづくりに向け、検討を重ねています。今後継続して開催する専門家を対象としたセミナーのカリキュラムの開発や人材発掘、専門家の職能の開拓等を目指します。



●京町家ネットワーク推進事業(11年4月~)

京町家の保全・再生に向けた居住者や事業者の主体的な取組を活性化するための仕組の整備に向けて、市民、京町家所有者、専門家、企業、市民活動団体等の幅広いネットワークづくりに取り組んでいます。このほど「(仮称)京町家ネットワーク会議」が立ち上がりました。また、京町家ネットワーク推進事業の一環として、木造建築等に携わる方々を講師に迎え、毎月第4木曜日にセンターにおいて「木の文化セミナー」を開催しています。



京町家の保全・再生事例
不安を安心にかえる

「堺町画廊」(中京区堺町通御池下る)



堺町通に町家を改装した画廊が風格を持ってたずむ。堺町画廊と大きく書かれた暖簾をくぐり、伏原長子、納知子さん親子を訪ねた。

明治9年建築のその町家では、もともと呉服商が営まれていた。明治27年、医者であった先々代が移り住み、表で診療所を開いた。先代、亡きご主人と受け継がれたその後を画廊に改装したのは、1982年、今から17年前のことである。

その頃の風潮は、「古い町家は壊してマンションに建て替えるのが一番賢明」と言われた時代だった。今こそ町家の再生とまではやされているが、先例は知らない、全てが手探りであった。

不動産屋から家を「無価値」と言われる。「愛着のあるこの家を潰すなんて...」改装するというと、工務店に嫌がられた。「自分の生まれた家、潰すのはもったいない」。悩んだ末、信頼できる知り合いの工務店に依頼した。だがその頃、古いものを活用するという考えはない。家の設計は娘さん自らが手掛け、梁や縁側、中庭をそのまま活かした。今もその中庭に降り注



ぐやわらかな陽射しがギャラリーを包む。

17年の間で何度か試練もあった。パブルの頃は売却を迫られた。出入りの職人さんも代替わりし、ちょっとした補修もしてくれなくなった。そこへ隣にビルが建ち、軒を切られた屋根は雨漏りが急にひどくなる。一昨年のことだ。修理してくれる人を探したが出会えない。不安な日々が続いた。

そんなときに京町家再生研究会(1)に巡り会った。「あかん」と言われ続けていた家の価値を認めてくれた。「大丈夫ですよ。駄目だと思っていた屋根がきれいに直る。ほっと胸を撫で下ろした。その後、京町家作事組(2)を紹介してもらった。ちょっとした手入れもしてくれる。縁側の一部も直してくれた。今まで不安で仕方がなかったのに、安心して任せることができた。

「孤立無援で心細いと思っている人は多いはず。特にひとりでお住まいの高齢者の方はどれだけ不安でいらっしゃるか。精神的なメンテナンスが必要です」と伏原さん親子は言葉を強く言う。「今の町家再生の動きはブームになっているところもあり、長続きするかどうか...。町家はしょっちゅう手を入れていたら、長持ちします。毎日見ているので、傷みがすぐ分かるんです」。愛着を持って暮らしているのが伝わってきた。不安な気持ちを安心に変える。これは京町家の再生へ向けてのキーワードではないだろうか。

(1)京町家再生研究会：京町家の再生に向け平成4年に発足した市民団体。研究のみならず実践活動を行っている。

(2)京町家作事組：京町家の再生に向け今年春に発足した職人集団。様々な職能を持ち、相談から具体的な工事まで京町家の改修を手掛ける。(ニュースレター第7号で紹介)

『まちづくり交流』

きょうとNPOセンター

21世紀を迎えようとしている今、地方分権の大きな時代の流れを背景に、NPO等の市民活動の役割が一層重要視されてきています。そこで、今回は、NPOをサポートするセンター、つまり、NPOのためのNPOとして活動されている「きょうとNPOセンター」を紹介します。

「きょうとNPOセンター」の設立

伝統ある京都の社会に長く根付いている自治組織をはじめとする市民活動に加えて、阪神・淡路大震災や日本海石油流出事故、さらに2000年から公的介護保険制度が実施されるという状況の中、昨年7月、幅広く分野を越えた市民活動団体ネットワークの拠点となる「きょうとNPOセンター」が設立されました。

このセンターの運営には、学識経験者やNPO関係者、学生等約40名が携わり、特定非営利活動促進法に関する相談をはじめ、セミナーの開催による情報提供や人材育成、調査研究等様々な活動を展開しています。

このセンターの特徴の一つは、行政等から呼び掛けられて設立されたのではなく、市民が自主的に思いを結集して設立された組織で、「きょうと」という生活領域に根差した民間独自のサポート活動を行っていることです。

もう一つの特徴として、会員制度を採用していないことがあります。NPOの多くは資金繰りに困窮しているのが現状ですが、会員だけがサポートを受けられるというのではなく、小さな草の根の市民活動こそ支援が必要だと考えているからです。この組織原則は他にない制度で、各方面から注目を集めていることの一つです。

障害者・高齢者のライフデザインプロジェクト



移動サービスの実践を通してプロジェクトに取り組む様子

「きょうとNPOセンター」では、これまでの1年余りの支援活動を通じて、NPO支援のあり方を議論してきました。その結果、センター自身が新たな活動に取り組み、社会のシステムを構築することも、ボランティア活動の広がり確保し、未来の市民活動を「創る」ことにつながると認識しました。そこで、今年度から「障害者・高齢者のライフデザインプロジェクト」を展開して、障害者や高齢者が社会の一員として社会に参画していく仕組みづくりに取り組んでいます。その中の一つに、移動サービス事業があります。日本の公的制度の中に「移動サービス」がきちんと位置付けられていないという現状や、

社会的認知度が低いため、資金がなかなか集まらないということを踏まえ、移動サービスを行っているボランティア組織のネットワーク化、また、施設や作業所、病院等との連携を進めています。

その他にも、障害者のためのパソコン教室や自動車運転免許を取得するためのサポート等にも取り組んでいます。

今後の取組に向けて

「きょうとNPOセンター」は、今年7月には町家を新しい拠点に、専従職員2名と運営委員1名の計3名が常駐する形で新しくスタートし、また、10月にはNPO法人として認証されるなど活動が活発化しています。「表面上でなく、手をつなぐことによって新しい可能性が生まれるような、そんなネットワークの基盤づくりをしたいと考えています。また、全国でも有数の『大学のまち』であるという京都の特色を生かし、京都に根を張る研究者・大学院生・NPO活動者を結び付け、地域に根差した活動を展開したいです」と事務局長の深尾さん。まちづくりの分野において、重要な存在となるNPO。そのサポート役として、これからの

「きょうとNPOセンター」の活躍がますます期待されます。



お問い合わせ

きょうとNPOセンター
京都市中京区数屋町通二条下尾張町212-4
TEL : 075-223-5291 FAX : 075-223-5292
<http://www.jca.ax.apc.org/ohbora/kyotonpo>

まちづくり提案

「京都子ども工房」

～自宅を開放し子供たちの学習・交流の場に～

今、子供を取り巻く状況は大きく変化しています。外で遊ぶことが少なくなり、地域の大人と接する機会が減るなど、子供と地域社会との関係はますます希薄になっています。学校や家庭だけでなく、地域や地域の大人との関係の中で、子供たちの豊かな創造力と自律性が育まれていくことが期待されます。

こうした中、子供たちが地域社会やコミュニケーションの大切さを実感することができるよう、北区にお住まいの清水彰さんが自宅を開放し、子供たちの学習・交流の場として「京都子ども工房」を2年前にスタートしました。

工房では、毎週月曜日と金曜日の夕方に、近くの小学2年生から5年生までの9人が集まり、自分たちで調べ、考え、まとめるトレーニングを行う「まなび工房」のほか、社会人



子供たちの作った夢のまちの模型

の方に講師になってもらう「おもしろ工房」、キャンプなどの「体験工房」を開いています。

また今年夏、近くの新大宮商店街で行われた「新大宮夏祭り」に日頃の学習の成果を発表するという形で参加したことをきっかけに、11月3日には新大宮商店街の協力を得て「子どもまつり」を開催しました。

当日は、商店街の一角にある空店舗を借り、子供たちの想うまちを表現した模型や、手作りの絵本、まちの写真などが展示されると共に、表通りでは創作和太鼓の演奏が行われ、威勢のいい太鼓の音と子供たちの元気な声に、道行く人が思わず立ち止まる姿が見られました。

「今は自宅を使っていますが、できれば商店街の空店舗を活用したいと考えています。商店街にはいつも人がおられるし、またいろんな職業の人がおられ、面白い話を聞くこともできます。子供たちにとって、時には叱られることもいい経験でしょう」と清水さん。

「将来的には、地域や地域の小学校とも連携し、もっと多くの子供が集まり、地域の大人とのふれあいの中で、地域が子どもを育てていくような環境ができれば」と夢は膨らみます。



「子どもまつり」での和太鼓演奏の様子

お問い合わせ
京都子ども工房

TEL : 075-493-8597 (清水さん宅) まで

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階の新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

株式会社 カーボテック

代表取締役 石橋 昇氏

- どのような事業をされているのですか。

地域から排出される様々な廃棄物を原料にして、独自の炭化処理技術でリサイクル製品を生み出し、それらを地域の環境浄化に役立てるというリサイクル事業の開発に取り組んでいます。4年前から京都にある染工場と同様の開発に携わっていましたが、環境保全という社会的要請の高まりと行政の支援によって技術開発に一定のめどが立ち手応えが感じられたので、今後は自分の責任で進めたいということで、昨年7月に独立し、この会社を設立しました。



建築廃材や樹木剪定枝、間伐材などの廃木材や、おから、コーヒカス、モミガラなど植物系残渣といった有機系廃棄物に、貝殻粉砕など様々な無機系廃棄物を含む原料添加剤を配合し、専用の炭化炉で焼き上げ、新たな付加機能を持った「複合炭素材」を生み出しました。この技術を活用し、京都市の協力を得て、大型ゴミ焼却炉排ガス処理用のダイオキシン吸着剤の開発に成功し、現在、河川など環境水系の浄化材の開発を目指し、各地で実証実験に取り組んでいるところです。また、

住宅用調湿剤など活性炭技術を活用した様々な製品の開発、炭化リサイクルプラントのシステム提案や事業化コンサルティングを行っています。

- 従来のリサイクルシステムと違うところは。

従来からある生ゴミ等を堆肥にするコンポスト化は、原料成分に制約があり、製品の出口としては肥料などに限られ、しかも品質にバラツキがあり、あまり付加価値の付いたものではありません。私どもの活性炭化は、比較的幅広い原料を使うことができ、多少品質的な差はあっても、そこそこの機能を持った活性炭にできるのです。また、コスト的にも再生紙のように価格の開きはなく、トータルとして廃棄物処理コストの分を差し引くと従来品とほぼ同等の市場競争ができると考えています。

現在、工業的に作られる活性炭は東南アジアから輸入したものが全国的に使われ、リサイクルという視点がありません。やはり地域で出た廃棄物はその地域で有効に再利用する。私たちは、原料から製品市場まで地域で完結する地域完結型リサイクルの提案を行っており、そのリサイクルの輪を京都から全国に拡げていくことを目指しています。

戦後から高度成長期までに建てられた再生・再利用が困難な木造住宅が建替えの時期に入るので廃木材の総量は増えると言われていいます。良質の木材は住宅等に再利用し、それ以外のものはリサイクルして地域のために使う、それも環境浄化のために使うというのが一番理にかなっているのではないのでしょうか。そのためには、事業者の方には、何もかも混合解体するのではなくて、木質、金属片、コンクリートの部分をそれぞれ分別して搬出してもらおう訴えていく必要もあります。



- 今後の事業展開として目指されている点は。

リサイクルの場合、経済性というのが一番の問題で、その部分を打ち破れる技術を確認することが一番の目標です。その一つとして今力を注いでいるのが造粒という技術です。特に、水質浄化材では、パウダー状だと吸着能力が落ち、河川の二次公害にもつながりかねないということで、多孔性という「炭」の物理的特性を損なわずにボール状にする技術の完成を目指しています。さらに、球体成形した複合炭素材は野菜、果物の養液栽培培地としての利用、また汚染土壌の経済的な洗浄・修復処理が可能です。経済的で従来品と競合し得るレベルが達成できれば、大きなリサイクル製品の受け皿が生まれ、おのずとリサイクルが推進される資源循環型の社会が構築できるのではないのでしょうか。

《センター解説アワー》

GIS(地理情報システム)とまちづくり

最近「GIS」という言葉を耳にされたことはないでしょうか。

GISは、地図を使って色々な情報処理ができる道具です。今回は、様々な分野で注目されている「GIS」とまちづくりの関わりについてふれてみたいと思います。

GISとは?

GISは「Geographic Information System」の略で、地理情報システムや地図情報システムと呼ばれており、パソコン等で使用するソフトウェアの一つで、電子地図とデータベースを一緒に取り扱えるようにしたものです。

具体的には、例えば、個別に建物がデータ化されている電子地図に、個別に建物の情報(構造や高さ等)が入っている台帳のデータに関連付けます。すると、地図上で建物を押さえた(クリックした)ときにその建物の情報が表示されます。また、ここからがGISの得意とするところですが、同じデータベースを使って、町ごと・街区ごとの木造建物の比率計算や、築年数ごとの構成比の算出など色々な集計、統計処理を地図上で行うことができます。さらに、2地点の間の最短経路を計算したり、ある建物から一定距離にある商店を全てリストアップする等々の分析作業にも使うことができます。

京都市におけるGISの取組

京都市では、1/2,500の都市計画基本地図によって、用途地域等の都市計画の内容を表示する都市計画情報システムを整備しています。

用途地域とは、都市内で建てられる建物の用途(住宅、店舗、工場等)や規模を制限することにより、例えば住宅地の中に大規模な工場が建てられたりすることを防ぎ、秩序ある土地利用を図っていくための都市計画上の制度です。

都市計画情報システムでは、知りたい土地の用途地域等の内容を、市民の方がタッチパネル(銀行等にある、画面を直接触って操作する仕組み)を使って検索し、地図と共に表示、印刷することができるように、現在整備を進めています。

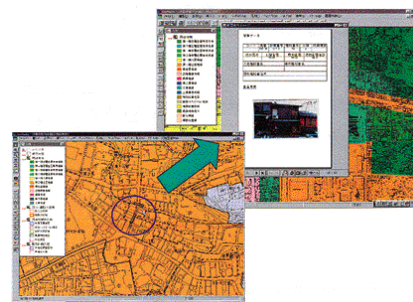
まちづくりとGIS

まちづくりとの関係で地理情報を考えてみましょう。みんなで、地域のマップづくりなどをしながら、自分のまちの良いところ発見したり、課題をあれこれ考えたり、議論したりする場面があると思います。

私たちは、「この辺りにもずいぶんマンションが増えてきたな」とか「あの公園は緑は多いけど、夏は虫が多くて困る」といったように、身近な場所に関する情報をたくさん知っています。しかし、例えば「この学区にはマンション

が何件建てていて、世帯数は一戸建と比べてどうか」とか「緑がどのくらいあってどのように分布しているのか」などといった情報を分かりやすくマップに表示することは、大変手間が掛かる作業で、少し条件を変えて作り直すことも自在にはできません。そのときに、地図上でそういった情報を整理したり、集計や統計的処理を行うことができるGISは、自分たちの地域を客観的に知るための強力な道具となり得ます。

GISは、技術的にもまだまだ進歩していく段階にあり、現実にもまちづくりに関して活用されている事例は多くはないのですが、当センターとしても、住民の皆さんによる地域の実態把握、地域情報の受信、地域情報の管理など地域のまちづくりの促進に向けての活用方法等について、現在検討を行っています。



私と京都



魅惑の「みやこ」

大学に入学するために、奈良の片田舎から出てきてからのことだから、もう、京都に住むことになって随分の日が経つ。

市電が走り、トロリーバスも走っていた頃である。清水寺の近くに下宿し、春の宵、窓の下に行く舞妓さんのこぼりの音に胸をときめかしたこともあった。

しかし、その頃につき合った友達は何故か、皆外から来た者であった。女友達も男友達も、出会い、そして去っていった。今私と暮らしをともにする家内も京都生まれではない。

学生時代の私にとっての京都は、王朝文学の世界であり、それが現実にそぐわないことなどは、問題にはならなかった。いつまでも現実感覚の伴わない都市であった。それよりは、何故か北の古い城下町に惹かれよく旅をしたものだ。

伏見のマンションに長く住み、その後また、伏見のテラスハウスに住み、団地の自治会長も経験した。ここも京都に何かの縁で参入してきた人たちの世界であった。大学もまた、京都にありながら、学生も教職員も地域の人と言うイメージはない。京都出身の学生より留学生の方が多いのではないか。こんな風に回想してみると、私は何時までもエトランジェであり、「見る」者でしかない。京都に生まれ京都の高校を卒業した後オース

(財)京都市景観・まちづくりセンター評議員
東樋口 護
 京都大学工学部助教授、京都のまちづくりを考える会会長

トラリアに移住した若い森本監督が、脚本を書きメガフォンをとった『いちげんさん』は、京都にのってのエトランジェ同士の恋の物語であるが、どういう気持ちでの映画をとったのだろうか、ということを考えていて、ふと気付いたことがある。実に当たり前のことなのだが、エトランジェも、京都にあこがれて京都を見る者も、京都の一部なのだということである。

こんな風に、単なる憧れを越えて冷静に京都に對することが出来るような気がするのも、職人・町家・都市について京都に学び、何らかの働きかけをしたいと思いつけて来たからかもしれない。

外見のきらびやかさに惑わされ眺めるだけではちっとも見えてこない、見続けることによって、ある時ふっと裂け目が現れる、そんな内側に何重にも折り畳まれた街ということが出来よう。その瞬間に切り結ぶ実感こそ都市の魅力なのだ。

たしかに、京都には侵されない堅固な芯のようなものがあって、それが故に魅力と輝きが持続する、「惹きつけながら拒む」そんなアンビバレントな場所なのかもしれない。それはまた、多くのドンキホーテが槍をふるいたくなり、その無謀のエネルギーを上手に吸い取って輝きを持続する「みやこ」であるのだろう。近頃そんな風に思う。

センター語録

センターの一員になって半年が過ぎようとしています。

当初は今まで経験してきた職場とはあまりにも違う部分が多いため、何だか不思議な空間に来たようでした。

ここでは、毎日、新鮮なまちづくりに関わる情報が勢いよく飛びかっています。様々なまちづくりの取組に関わることもできます。そして最も楽しいひときは、センターを支えてくださっている個性的で、魅力的で元氣あふれる住民の方々や、学識経験者、専門家、文化人の方々のお話を聞かせていただいている時です。

京都の歴史、伝統、文化、形あるもの以上に形のないものの計り知れない広がりや深さを垣間見る機会に恵まれることもしばしばあります。

多くの刺激と、発見と感動に包まれ、どうやら好奇心だけは人に負けない私にとっては、最高の環境のようです。

その昔、思い描いていた「京都のまちをよくする」という大それた夢の実現のための一歩として、少しでも皆さんのまちづくりの活動の助けとなるよう頑張っていきたいと、こぶしを握り締めている今日この頃です。

(景観・まちづくりセンター事務局 T.M)



センターからのお知らせ

賛助会員の募集 (平成11年度分)

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

[特典] ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
 ・ニュースレターでの活動紹介
 ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年会費]

個人1口: 5千円 団体1口: 5万円

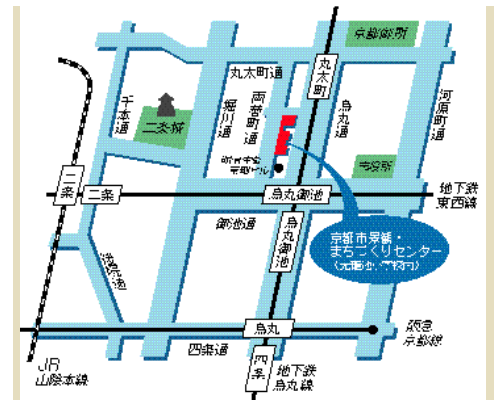
まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

京まち工房 ホームページ
<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>

センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。

(財)京都市景観・まちづくりセンター「京まち工房」案内



〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下の金吹町 452 (元龍池小学校内1階南側)

TEL 075-212-4031
 (支援・参加・人づくり)
 FAX 075-212-4047
 e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等
 月～金(祝日を除く)9:00～17:00
 来所される場合はなるべく事前にお電話ください。
 なお、駐車場はありませんので地下鉄をご利用ください。

ニュースレター 京まち工房 第9号 1999年12月
 編集・発行 (財)京都市景観・まちづくりセンター
 印刷 日本写真印刷株式会社